校内研修計画

山梨市立　岩手小学校

１　学校課題

本校は少人数校であり、教師の個別指導が行き届く反面、児童の主体的な学習につながりにくい。また、意見の表出の機会や互いに意見を交流する場面が少なく、自己肯定感、自己有用感を持ちにくい傾向がある。学習に関しては、興味や関心をもって進んで取り組もうとする児童も多いが、学力の個人差があり、基礎的な学習内容が理解できていない児童もいる。発表の場を設定する中で、自分の考えに自信を持ち、表出することが少しずつ身についてきているが、苦手な児童もいる。

２　研究主題

『主体的・対話的で深い学び』をめざした授業改善の実践

３　主題設定の理由

昨年度は、研究主題として、『学校課題を解決し、『主体的・対話的で深い学び』をめざした授業改善の実践』を設定し、ＷＧ（ワーキンググループ）による取組と日々の実践を積み重ね、授業改善を行ってきた。各ＷＧで学校課題の解決に向け、充実した取組を行うことができた。また、学校全体がICTの活用に積極的になり、学習のいろいろな場面でICT端末を使い、まとめたり発表したりするなど、子供達のスキルも向上してきている。また、ICTを活用した様々な教材を作成することができ、成果をあげることができた。

そこで今年度は、学校現場で広く課題となっている子供主体の授業づくりに焦点をあて、市のリーディングDXスクール事業の取り組み等を参考にして授業改善に取り組んでいく。また、１人１台端末とクラウド環境を活用した授業を実践できるように、教師のICT端末活用のスキル向上を図るなど教員各自が主体となり、研究を推進する自己研修に重点をおいていく。昨年度に引き続き、ＩＣＴ環境を活用した個別最適な学びと、協働的な学びの充実を図り、子供が主体となる授業づくりを通して、児童が多様な他者と協働したり、自ら自己調整したりして学習を進めていく姿を目指すことで、主体的・対話的で深い学びを充実させていきたいと考え、本研究主題を設定した。

４　研究の方法と具体的内容

児童の実態をふまえ、自己研修をし、日々の実践を積み重ね、授業改善をする。また、校内における共通財産として研究の場を設ける。

（１）一人一実践による授業改善

（全員が校内研のテーマに沿った一実践を行う。可能なかぎり参観し、振り返りを行う。

　　　　　　　　　主体的に研究を行い、自身の資質向上を図っていく。）

（２）講師を招聘しての学習会

（ＩＣＴスキルアップ、子供主体の授業づくりなど）

（３）ＯＪＴの取組

（日常的に教員間の相談・共有から、教員としての資質・能力を高めるＯＪＴに発展させる。）

５　研修計画

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 月 | 日 | 曜 | 回 | 主な内容（予定） | 形態 |
| ４ | ３ | 水 | １ | 研修①研究の方向について | 全体 |
|  | 14 | 月 | ２ | 研修②校内研修全体計画について | 全体 |
|  | 25 | 金 | ３ | 研修③　自己研修　 | 個人　 |
| ５ | ７ | 水 |  | 教育研究❶　教協春季教研 |  |
|  | 14 | 水 |  | 北中ブロック交流① |  |
|  | 21 | 水 | ４ | 研修④　学習会 | 全体　講師招聘 |
| ６ | 11 | 水 |  | 教育研究❷ |  |
|  | 18 | 水 | ５ | 研修⑤　学習会 | 全体　講師招聘 |
| ７ | ２ | 水 | ６ | 研修⑥　自己研修 | 個人 |
| ８ | ８ | 金 |  | 教育講演会・教育研究❸ |  |
|  | 20 | 水 | ７ | 研修⑦　還流報告（全国学力学習状況調査結果分析） | 全体　 |
| ９ | 10 | 水 |  | 教育研究❹　統一授業研 |  |
|  | 17 | 水 |  | 教育研究❺　秋季教育研究会 |  |
|  | 24 | 水 | ８ | 研修⑧　 自己研修 | 個人 |
| 10 | 22 | 水 | ９ | 研修⑨ ブロック交流研に向けて | 全体 |
| 11 | 19 | 水 |  | 北中ブロック交流②(岩手小授業公開) | 全体 |
|  | 26 | 木 | 10 | 研修⑩　実践報告① | 全体 |
| １ | 14 | 水 |  | 教育研究❻ |  |
|  | 21 | 水 | 11 | 研修⑪　研究紀要について、実践報告② | 全体 |
|  | 28 | 水 |  | 教育研究❼　統一授業研 |  |
| ２ | 12 | 木 | 12 | 研修⑫　研究のまとめ、来年度の研究の方向について | 全体 |
| ２ | 19 | 水 |  | 教育研究❽　冬季教研 |  |

　（研究主任　加々美　教子）